

『嫁威谷物語』の諸本と作者に関する考察

膽 吹 覚

はじめに

福井県と石川県の県境に近い、福井県あわら市金津町山十楽に嫁威という字がある。この嫁威という字名は、この付近にある嫁威谷という地名に由来すると言われている。本稿で考察する『嫁威谷物語』は、この嫁威谷という地名の由来を説くとともに、本願寺第八世蓮如の遺徳を讃える仏教説話である。

『嫁威谷物語』のあらすじは、凡そ以下の如くである。

吉崎山の南麓、二の股というところに、百姓の与惣治がその老母と妻との三人で暮らしていた。当時、吉崎山には本願寺の蓮如が、京都の騒乱を逃れてこの地に移り住み、その山麓に吉崎御坊を建立して、真宗の布教活動を展開していた。蓮如は真宗の宗祖親鸞から数えて第八世にあたる人である。与惣治と妻は蓮如に帰依し、吉崎御坊に足しげく通い、蓮如の教化を受けていた。与惣治の老母はしかし、邪見な人であったので、息子夫婦が蓮如に帰依することを嫌い、夫婦の吉崎参りを断念させようと、文明四年（一四七二）二月

二十日の夜、兼ねてからの奸計を遂に実行に移す。この夜、与惣治は所用があつて不在であつたので、妻一人が吉崎に参詣した。老母は嫁が御坊からの帰り道に待ち伏せて威かせば、気の弱い嫁は二度と吉崎へは参詣しないだろうと考え、御坊からの帰路にあたる産土神の祠に祀つてある鬼女の面を被り、白帷子に着替えて、祠の後ろの竹藪に身を潜め、嫁がその前を通るのを今か今かと待ち構えていた。そうした奸計など露ほども知らぬ嫁は、一人で祠の前にさしかかる。老母はここぞとばかりに竹藪より飛び出して嫁を威かさうとしたが、その着物が茨に引っ掛かり、機を逸してしまう。竹藪で一人悔しがる老母であるが、その被つていた面を外そうとした時、どうしたことかその面が老母の顔から離れない。愕然と立ちすくむ老母。その姿は正しく鬼女そのものであった。一方、無事に家にたどり着いた嫁は老母の不在を怪しみ、帰宅した夫とともに老母を探し歩く。すると、今来た道の産土神の祠の奥の竹藪から老母の声がするではないか。しかし、その姿は恐ろしい鬼女であった。老母は涙を流して、与惣治夫婦にこれまでの経緯を懺悔する。それを聞いた

夫婦は、老母を伴って吉崎の蓮如を訪ねる。蓮如は老母の懺悔を聞き、老母に阿弥陀如来の本願を説く。蓮如の教化によって仏縁を得た老母が「南無阿弥陀仏」と唱えると、あら不思議や、鬼女の面がはらりと落ち、もとの老母の姿に戻った。与惣治一家はこれを喜び、ますます蓮如に帰依し、真宗の教えを守り、国法を重んじ、奢侈を慎み、家業の農作に励んだので、次第に家は栄え、有徳の身となったという。そして、村の人びとは与惣治一家の行ないを讃えて、老母が隠れた竹藪の辺を「嫁威谷」と名づけ、また、老母が被っていた面を大切に保管したという。

管見に従えば『嫁威谷物語』の研究は、その諸本の整理も未だなされておらず、また、その作者も不明とされている。そこで本稿では『嫁威谷物語』の基礎的研究として、その諸本と作者に関する考察を試みたい。

1 諸本

『嫁威谷物語』の諸本を調査した結果、次の五点が確認できた。なお、今回の調査では本書の写本は確認できなかった。

(a) 弘化四年（一八四七）版

① 膽吹覚所蔵本（以下、筆者架蔵本）

② 愛知県西尾市岩瀬文庫所蔵本（以下、岩瀬文庫本）

右の二点以外に、福井県金津町立図書館が制作した『蓮上人御教化 嫁威谷物がたり』（制作年未詳）と題する冊子に、「皇都書林／五条堺町東へ入 菱屋友七／東中筋魚棚上 菱屋宇助／五条堺町西へ入 丁子屋定七」の奥付（裏表紙見返し）を有する弘化四年版の

『嫁威谷物語』の複写が掲載されている。後述の通り、筆者架蔵本の裏表紙見返しは白紙で、その書袋に「合鞠堂梓」とあり、両書はその奥付が相違する。丁字屋定七他の奥付を有する版本は、金津図書館制作『蓮上人御教化 嫁威谷物がたり』十五ページ欄外に「本の所有者、戸崎氏」とペンで注記されており、「戸崎氏」所蔵本を図書館が複写し、制作したことが知られる。そこで、金津図書館にこの「戸崎氏」について問い合わせたが、それについては知るところがなく、図書館ではその個人を特定することはできないという。ゆえに、現在のところ、私はこの「戸崎氏」が所蔵していたと推定される版本を実際に見ておらず、その存在を確認できていない。そこで、本稿では福井県金津町立図書館が制作した『蓮上人御教化 嫁威谷物がたり』に収録された戸崎氏所蔵本の複写を③「戸崎氏蔵本」と今仮に称し、弘化四年版の参考資料として使用することにする。

(b) 西宗寺版

① 福井大学総合図書館郷土資料室所蔵本（以下、福大本）

② 大阪大学附属図書館忍頂寺文庫所蔵本（以下、阪大本）

(c) 明治二十一年（一八八八）版

① 国立国会図書館関西分館所蔵本

(a) 弘化四年版

弘化四年（一八四七）の翌年、嘉永元年（一八四八）は蓮如上人二百五十回忌の年にあたる。『嫁威谷物語』の弘化四年版は、その翌年に厳修される蓮如上人二百五十回大遠忌法要に当て込んで企画・出版された本とみてよいであろう。

① 筆者架蔵本

一冊本。版本。半紙本（縦二十二、二×横十五、五）。四つ目袋綴。原装縹色池水蓮花型押表紙。左肩單辺題簽（原題簽・刷に「蓮上人／御教化 嫁威谷物がたり 全」。内題「蓮如上人／御教化 嫁威谷物語」（第一丁表）。柱題「よめおとし谷」。尾題「嫁威ものかたり」（第十五丁裏。表紙見返し並びに序文・凡例なし。四周單辺無界九行（匡郭十七、九×十三、二）。白口單黒魚尾。「一（十五了」、全十五丁（欠丁なし）。漢字平仮名交り文。句点・振り仮名・濁点あり。挿絵三枚。第二丁裏と第三丁表に「老若吉嵩群参して教化を請る」（図1）、第七丁裏と第八丁表に「老婆の邪慳信者を懲さんとす」（図2）、第十二丁裏と第十三丁表に「真心念仏によつて自から被たる面脱落る」（図3）。すべて木版画である。刊記は「弘化四年丁未冬／正定閣述作（第十五丁裏、図4）。裏表紙見返しは白紙。書入、不審紙なし。蔵書印なし。書袋（縦二十一、八×横十六、六）あり（図5）。その中央部に「蓮上人／御教化 嫁威谷物語 全」、その右側には「蓮如上人北国御勸化のをりから慳貪邪見の老婆ありて信者を妨せし御罰にて生ながら鬼畜となりしを上人の御教化にて直ちに原のかたちに帰りたる有がたき物語也」との宣伝文が載り、その左側には「皇都書林 合翰堂梓」と版元が記されている。



図1 筆者架蔵本（第2丁裏・第3丁表）

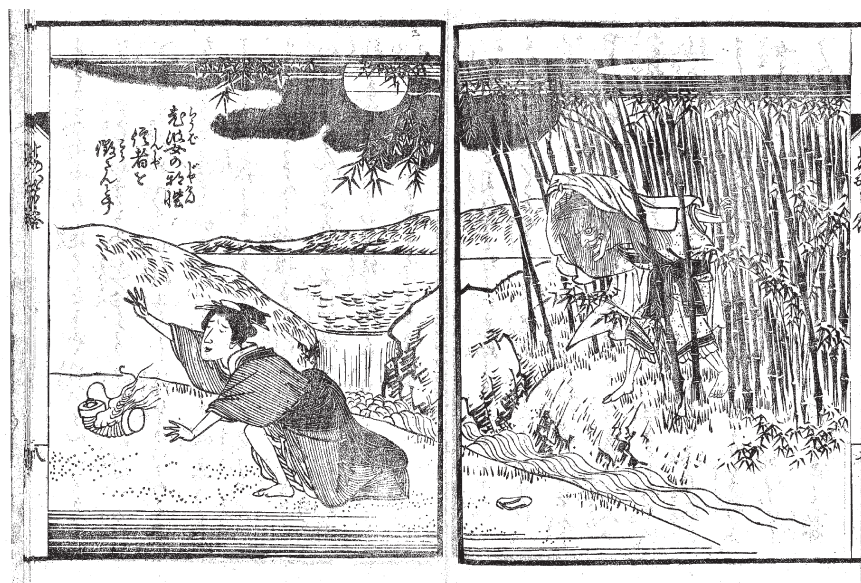


图2 筆者架蔵本（第7丁裏・第8丁表）

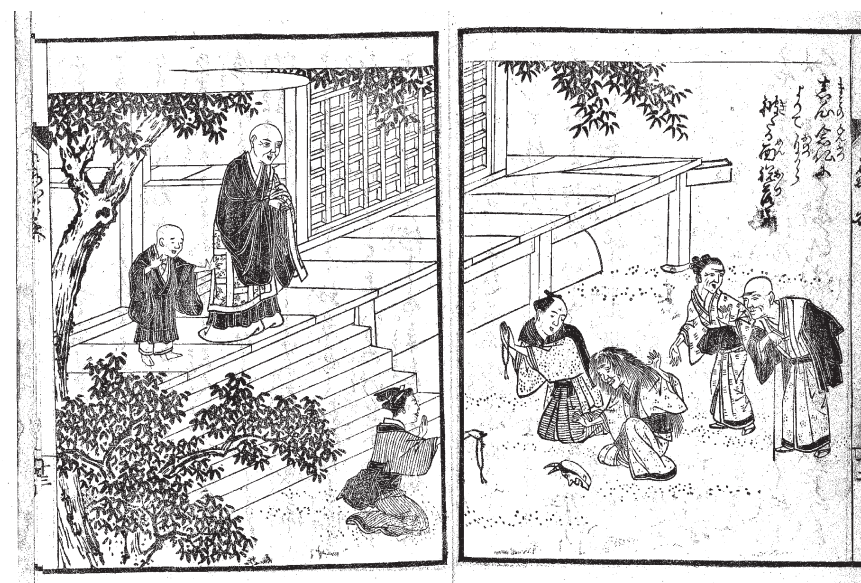


图3 筆者架蔵本（第12丁裏・第13丁裏）

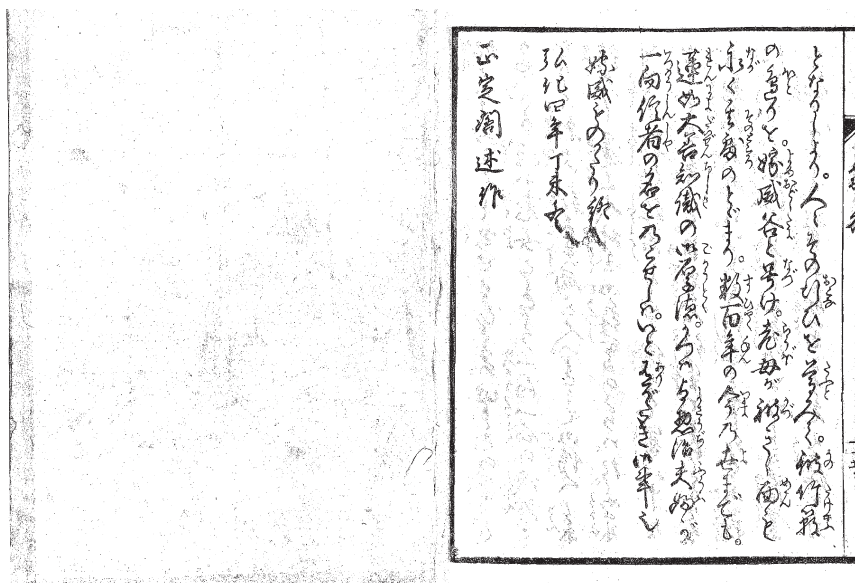


図4 筆者架蔵本（第15丁裏・後表紙見返し）

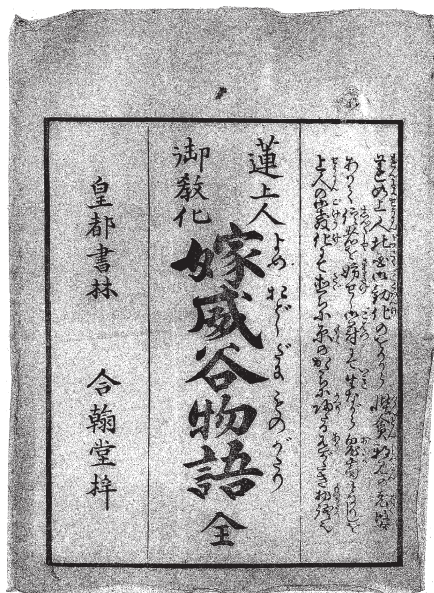


図5 筆者架蔵本の書袋

② 岩瀬文庫本

岩瀬文庫本は『縁起類聚』（版本）として一括する四冊本の中の第二冊の三番目に収録されている。

岩瀬文庫本と筆者架蔵本とを照合してみると、その表紙、本文（振り仮名、句読点を含む）、挿絵、装丁は同じである。相違する点は岩瀬文庫の第一丁表に「岩瀬文庫」の蔵書印が捺されていることと、その第十五丁裏の末尾に「正定閣述作」という一文がないことである。この「正定閣述作」の部分は削除されたものではないかと筆者は見ている。③そして、そうであるならば、岩瀬文庫本の成立は筆者架蔵本より後ということになる。

③ 戸崎氏蔵本

戸崎氏蔵本は複写物であるから、元の寸法や表紙の色などは不明である。また、複写された印刷面が不鮮明であるために、その版心と印記（第二丁表）も判読できない。ただ、その本文（振り仮名、句読点を含む）は筆者架蔵本と同一である。挿絵は図1が落ちていたが、これは複写をとった際、或いは複写を製本する際に落としたものであろう。図2・3は筆者架蔵本と同一である。本書は前述の通り、その裏表紙見返しに「皇都書林／五条堺町東へ入 菱屋友七／東中筋魚棚上 菱屋宇助／五条堺町西へ入 丁子屋定七」の刊記を有する。筆者架蔵本では版元は合輪堂だけであるが、戸崎氏蔵本は丁子屋定七他による合梓である。戸崎氏蔵本と筆者架蔵本との前後関係は不明であるが、戸崎氏蔵本もその第十五丁裏末尾に「正定閣述作」とあるので、戸崎氏蔵本の成立は岩瀬文庫本よりは前ということになる。なお、岩瀬文庫本が筆者架蔵本から出たのか、それとも戸崎氏蔵本から出たのかは不明である。

(b) 西宗寺版

西宗寺は京都市山科区西野広見町にある浄土真宗本願寺派の寺院である。寺伝によると、その創建は室町時代中期の文明十一年（一四八一）という。西宗寺は近世を通じて光照寺（大谷派）とともに蓮如の墓の管理を担当していた。

西宗寺版は福大本と阪大本の二点が確認されている。福大本と阪大本を比較すると、本文、挿絵、外題、内題、刊記などは同一であるが、ただ表紙の色が相違する。福大本の表紙は浅葱色無地で、阪大本は砥粉色無地である。福大本・阪大本のいずれの表紙が原装か、

或いはともに改装かは不明である。また、蔵書印を見ると、福大本には第一丁表に「葦田伊人図書記」「福井大学図書之印」の二種が捺されており、この本が歴史地理学者、蘆田伊人の旧蔵本であることが知られる。蘆田は福井県福井市の出身。近世の地誌を集大成した『大日本地誌大系』の編纂者としてその名を知られる人である。

蘆田はまた近代を代表する蔵書家としても知られており、その研究のために蒐集した古地図や地誌の多くは、現在は蘆田文庫古地図コレクションとして明治大学附属図書館に所蔵されている。蘆田は太平洋戦争中の昭和二十年（一九四五）に東京を離れ、彼の蔵書の一部と共に郷里の福井県に疎開。しかし、その三年後に起こった福井大地震により福井疎開の蔵書の大半を焼失してしまふ。そして、その残余を福井大学に売却し、それ以後、蘆田は長野県諏訪市にその住まいを移す。すなわち、福大本は福井大震災後に蘆田が福井大学に売却した蔵書の一部と見られる。一方の大阪大学附属図書館の忍頂寺文庫は、近世歌謡の研究者として有名な忍頂寺務氏の旧蔵千九百九十点を収蔵する文庫で、特に近世歌謡・近世小説を中心とした文庫として知られる。忍頂寺文庫所蔵の『嫁威谷物語』は、その表紙見返しに「大阪大学図書之印」、第一丁表に「大阪大学図書」「静村文庫」の計三種が捺されている。「静村文庫」は忍頂寺文庫蔵本にしはば見られる印記である。このように福大本と阪大本は表紙の色と蔵書印が相違するが、その本文と挿絵は同一である。そこで、本稿では調査の便宜上、福大本を西宗寺版の底本として使用し、必要に応じて阪大本についても触れることにする。

さて、弘化四年版（筆者架蔵本）と西宗寺版（福大本）とを比較すると、次の五点に於いて相違が認められる。

(一) 表紙

弘化四年版は縹色に池中蓮花の文様が型押しで施されているが、西宗寺版は浅葱色無地―阪大本は砥粉色無地―である。

(二) 外題

弘化四年版の外題の角書は「蓮上人」とあるが、西宗寺版では「蓮如上人」とある。

(三) 刊記

弘化四年版の刊記は「弘化四年丁未冬／正定閣述作」(図4)とあるが、西宗寺版ではこの部分がなく、その代わりに「売買不許／蓮如上人御往生之旧地／山科 西宗寺」(図6)と記されている。ゆえに、西宗寺版では刊記から刊行年を知ることができない。また、「売買不可」とあるので、西宗寺版は商品として市場に流通した本ではなく、参拝者或いは門徒への配り本であつたと考えられる。

(四) 本文

(ア) 第十五丁裏四行目行頭が、弘化四年版では「蓮如大善知識」とあるが、西宗寺版では「中興大善知識」とある。

(イ) 表1に示した通り、弘化四年版では適時打たれていた句読点や振り仮名が、西宗寺版では不自然なほど少ない。

(ウ) 西宗寺版では「御堂(を)建立し給ひ」(第一丁表八行目、「兩人つれに(て) 参る(も) のを」(第九丁裏三行目、「三人づれ(に)て」(第十五丁表三行目、「御発駕の(、) ちは」(同四行目)など数カ所において、文字の一部が欠けている。(一) 内は欠けた文字)。

(五) 挿絵

西宗寺版・弘化四年版ともに三枚の挿絵が使われているが、西宗

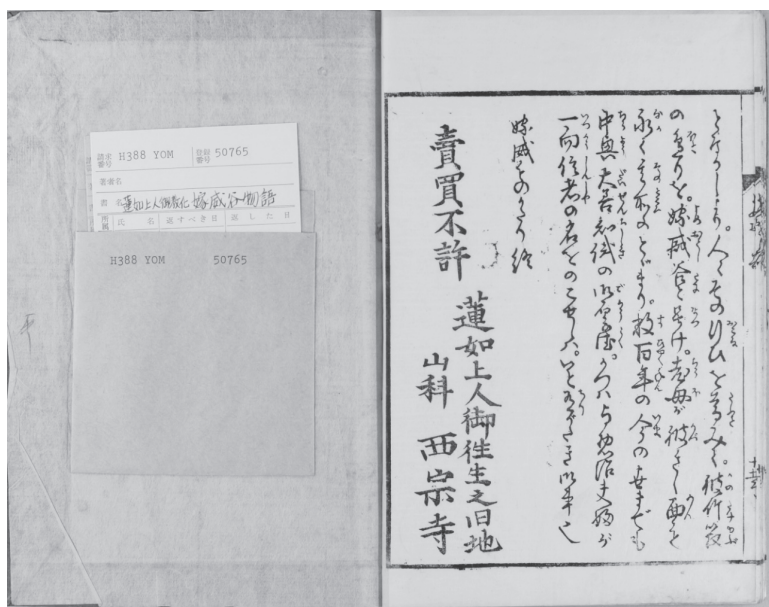


図6 福大本(第15丁裏・後表紙見返し)

〈表1〉『嫁威谷物語』諸本の本文対校表

弘化四年版	西宗寺版	明治二十一年版
<p>時は文明四年二月廿日のことなりしが。与惣治は所用ありて遠郷へゆきて。昨日より家にあらざれば。妻ひとり老母に留守をたのみ。暮ころより吉崎へ参りたるが。老母は心よく嫁を出しやりて。兼々工夫なしたれば。今宵こそ嫁ひとり行たれば。帰る道に待ぶせていたく驚かし。夫婦とも吉崎まゐりを止せんものと。初更ごろより家を出て。十丁斗の彼方に氏神の社にいたり。</p> <p>(第五丁目九行目く第六丁目八行目)</p>	<p>時は文明四年二月廿日のことなりしが与惣治は所用ありて遠郷へゆきて昨日より家にあらざれば妻ひとり老母に留守をたのみ暮ころより吉崎へ参りたるが老母は心よく嫁を出しやりて。兼々工夫なしたれば今宵こそ嫁ひとり行たれば帰る道に待ぶせていたく驚かし。夫婦とも吉崎まゐりを止せんものと。初更ごろより家を出て。十丁斗の彼方に氏神の社にいたり。</p> <p>(第五丁目九行目く第六丁目八行目)</p>	<p>時は文明四年二月廿日のことなりしが与惣治は所用ありて遠郷へゆきて昨日より家にあらざれば妻ひとり老母に留守をたのみ暮ころより吉崎へ参りたるが老母は心よく嫁を出しやりて。兼て工夫なしたれば今宵こそ嫁ひとり行たれば帰る道に待ぶせていたく驚かし。夫婦とも吉崎まゐりを止せんものと。初更ごろに家を出て。十丁斗の彼方に氏神の社に至り。</p> <p>(第五丁目九行目く第六丁目八行目)</p>

蓮如上人はいにしへの。祖師聖人の御再来にて。当流の善知識なれば。これより御山へ参詣なし。上人の勸化をも聞給はば。此世はたとへ鬼なりとも。未来成仏うたがひあるべからずとかきくときて勧めしかば。老母も此とき發起して。ともかくもよきやうこといつるに。夫婦はよろこび白帷子をかづけ顔を覆ひ。左右の手をとり吉崎の方にむかはせしに。今まで一歩も引れざりし五体が。もとのごとく和らき歩まれしかば。老母もはじめて其ふしぎを感じ。

(第十一丁表六行目ゝ同裏七行目)

蓮如上人はいにしへの祖師聖人の御再来にて。当流の善知識なれば。これより御山へ参詣なし。上人の勸化をも聞給はば。此世はたとへ鬼なりとも。未来成仏うたがひあるべからずとかきくときて勧めしかば。老母も此とき發起して。ともかくもよきやうこといつるに。夫婦はよろこび白帷子をかづけ顔を覆ひ。左右の手をとり吉崎の方にむかはせしに。今まで一歩も引れざりし五体が。もとのごとく和らき歩まれしかば。老母もはじめて其ふしぎを感じ。

(第十一丁表六行目ゝ同裏七行目)

蓮如上人はいにしへの祖師聖人の御再来にて。当流の善知識なれば。これより御山へ参詣なし。上人の勸化をも聞給はば。此世はたとへ鬼なりとも。未来成仏うたがひあるべからずとかきくときて勧めしかば。老母も此とき發起して。ともかくもよきやうこといつるに。夫婦はよろこび白帷子をかづけ顔を覆ひ。左右の手をとり吉崎の方にむかはせしに。今まで一歩も引れざりし五体が。もとのごとく和らき歩まれしかば。老母もはじめて其ふしぎを感じ。

(第十丁裏七行目ゝ第十一丁表七行目)

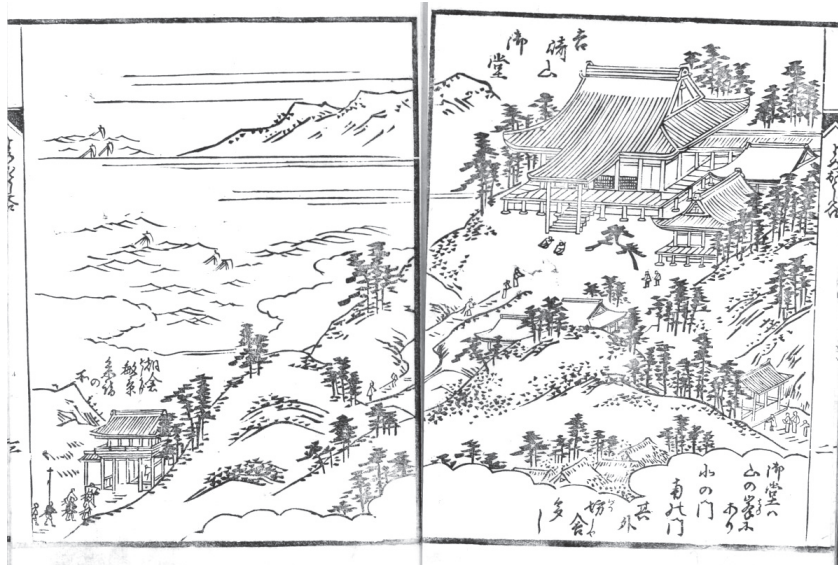


図7 福大本（第2丁裏・第3丁表）

寺版では、弘化四年版の図1が入っていたところに「吉崎山御堂」を描いた挿絵図7が掲載されている。図2と図3はそのままである。図7はその右上部に吉崎御坊を描き、絵の右下部に「御堂は山の峯（みね）にあり。北の門、南の門、其外坊舎多し」とあり、また、絵の左隅の山門の上には「朝倉敏景参詣の所」と記されている。しかし、『嫁威谷物語』に吉崎御坊の伽藍を描写した文章はなく、また、作品中に朝倉敏景は登場しない。ゆえに、図7は『嫁威谷物語』の挿絵としては、その本文と整合性に欠けるといわざるをえない。また、画風という観点からも図1・2・3は統一性があるが、図7は図1・2・3とはいささか違う印象を受ける。図7の絵師は、図1・2・3を描いた絵師とは別の人物であったのではなかったろうか。

このように見てくると、西宗寺版の成立は弘化四年版より後であるとしてよいであろう。弘化四年版は筆者架蔵本が先に印行され、その後に岩瀬文庫本が出版されたが、西宗寺版が筆者架蔵本から出たか、或いは岩瀬文庫本から出たかはわからない。もし西宗寺版が筆者架蔵本から出たならば、その場合は第十五丁裏にあった「弘化四年丁未冬／正定閣述作」の一文を西宗寺が削り、そこに「売買不許／蓮如上人御往生之旧地／山科 西宗寺」を入れたことになる。

また、もし西宗寺版が岩瀬文庫本から出たならば、西宗寺は岩瀬文庫本から「弘化四年丁未冬」の部分を削除し、そこに「売買不許／蓮如上人御往生之旧地／山科 西宗寺」を入れたことになる。

西宗寺版はその本文の振り仮名や句読点に欠落が目立ち、文字の一部も欠損しており、かなり磨滅した板木を使用していたことが推測される。すなわち、西宗寺版は弘化四年版をもとに新たに板木を彫り直したのではなく、磨滅の進んだ弘化四年版の板木をそのまま

ま使用したと考えられるのである。ただし、その際に図1は図7に差し替えられている。

(c) 明治二十一年版

明治二十一年（一八八八）に京都の永田文昌堂から出版された和装本の『嫁威谷物語』が、国立国会図書館関西分館に所蔵されている。その書誌を記すと、以下の如くである。

一冊本。版本。中本。袋綴。表紙は原装で、四周を竹で囲んだ意匠の中に「明治廿一年十月発兌／蓮如上人 御教化 嫁威谷物語 全／京都書林 永田文昌堂梓」と記されている。内題は「蓮如上人／御教化 嫁威谷物語」よめむしたにものがたり（第一丁表）。柱題はなし。尾題は「嫁威谷物語」（第十五丁裏）。表紙見返し、序文、凡例なし。四周单边無界九行。版心は「㊦（く㊧）」、全十五丁（欠丁なし）。漢字平仮名交り文。句点・振り仮名・濁点あり。挿絵は第二丁裏と第三丁表、第七丁裏と第八丁表、第十二丁裏と第十三丁表の計三枚。奥付（後表紙裏）は「明治廿一年十月十三日印刷／全廿一年十月十六日出版／定価七錢／著作者兼発行者 永田長右衛門 京都府下京区第二十三組山川町五番戸／印刷者 林繁治郎 京都府下京区第十七組中金仏町廿二番戸／大売捌所 川波卯助 東京浅草区諏訪町番戸」とある。

明治二十一年版を弘化四年版並びに西宗寺版と比較して、その書誌的特徴を記すと、次の如くである。

(一) 明治二十一年版は板を新たに刻んだもので、その本文は弘化四年版（筆者架蔵本）並びに西宗寺版（福大本）と比較すると、その一部で平仮名を漢字に、或いは漢字を平仮名に置き換えて

いる

(二) 西宗寺版で文字の一部が欠損していた箇所が多くが、明治二十一年版では修正されている。ただし、「三人づれ（に）て」（第十五丁表三行目）↓「三人づれで」（同所）、「御発駕おかへりの（、）ち」↓「御発駕おかへりのち」の二箇所だけは誤ったままである。

(三) 前掲の表1に示した通り、明治二十一年版の本文は振り仮名や句読点を見ると、それは弘化四年版よりは西宗寺版に近い。

(四) 明治二十一年版の挿絵は西宗寺版の挿絵を模写したものである。ただし、挿絵の中の文字はすべて省略されている。

このように見てくると、明治二十一年版は西宗寺版を底本として新たに彫り直して出版された本であると見て良いであろう。

ここで『嫁威谷物語』の諸本についてまとめると、次のようになるであろう。

『嫁威谷物語』の版本は、弘化四年版から明治二十一年版まで一貫して京都の書林・寺院で扱われた。従って、その流布も上方が中心であったと推定される。その諸本を成立の古いものから並べると、弘化四年版の筆者架蔵本が最も古く、次いで同年版の岩瀬文庫本、そして、西宗寺版、最後に明治二十一年版という順序になる。また、その本文（振り仮名や句読点を含む）と挿絵についても、筆者架蔵本が最も整っているといえる。ゆえに、戸崎氏蔵本が未見の現段階では、『嫁威谷物語』の底本は筆者架蔵本を用いるのが適切であるといつてよいであろう。明治二十一年版が西宗寺版を底本としたことは最善の選択ではなかったのである。

2 作者

国文学研究資料館データベース「古典籍総合目録」は、『嫁威谷物語』の作者について何も記していない。それは「古典籍総合目録」では、岩瀬文庫本と忍頂寺文庫本の二点しか確認できていないためである。しかし、筆者架蔵本並びに戸崎氏蔵本の第十五丁裏末尾には「正定閣述作」と、作者名が明記されている。本稿ではこの記事に従って、すなわち『嫁威谷物語』の作者は正定閣である、と仮定して考察してみたい。無論、「正定閣述作」の記事の信憑性を疑うことは可能であるが、本稿では一先ずこの記事に従って、『嫁威谷物語』の作者は正定閣である、との仮説に立って考察を進めてみたい。

それでは、この正定閣とは一体誰であろうか。まずは『嫁威谷物語』にその手掛かりを求めたいが、残念ながら『嫁威谷物語』には正定閣に関する情報は記されていない。また、近世の出版史料類からも『嫁威谷物語』に関する記述を見出すこともできなかった。^⑤そこで以下は、私の推測である。

前章で考察した通り、版本『嫁威谷物語』は一貫して京都の本屋・寺院で扱われている。ゆえに作者と仮定される正定閣も又、江戸末期の京都に居住した真宗の僧侶ではなかったか、と私は推測する。江戸末期の京都で正定閣の号で知られた真宗の僧侶といえ、真宗仏光寺派学頭で、同派大行寺の開基であった信曉がまず想起される。すなわち、私はこの大行寺の信曉が『嫁威谷物語』の作者、正定閣ではないかと推測するのである。『嫁威谷物語』が刊行された弘化四年（一八四七）は、信曉は七十四歳の年にあたる。

信曉の伝記は佐竹淳如・工藤康海『勤王護法信曉学頭』（大行寺史刊行後援会、昭和十一年六月刊）に詳しい。それに拠ると、信曉は江戸中期の安永三年（一七七四）八月一日、美濃国不破郡静里村の真宗大谷派長源寺に生まれた。十四歳の時に上洛し、仏学を修め、三十歳の時に長源寺を弟の本空に譲り、信曉は諸山の碩学を訪ね、研学に奨励した。その後、仏光寺第二十三代門主隨応に招かれて、文政二年（一八一九）に山内の宗学を中心であった妙頭寺を再興し、同四年（一八二一）には大行寺を開き、その住職に就任する。その後は仏光寺派僧侶の教育に尽力し、天保十一年（一八四〇）には法橋に叙せられ、次いで仏光寺派学頭に補任せられ、権小僧都に任ぜられた。安政五年（一八五八）六月十四日死去。享年八十五。なお、『勤王護法信曉学頭』はその第十三章に「僧都の著作」を設けて、計五十八の書名を挙げているが、その中に『嫁威谷物語』は含まれていない。

信曉には正定閣以外にも歎喜庵、霞水坊などの号があった。信曉がいつから正定閣の号を使用していたかは、現在のところ、それを確定することはできないが、『嫁威谷物語』が出版される弘化四年（一八四七）の四年前にあたる天保十四年（一八四三）に刊行された信曉の著作『法のゑん』（別名『いろはうた四十八首』、法光寺蔵版、筆者架蔵本）の第二丁裏に「正定閣」の号が記されており（図8）、遅くとも天保十四年（一八四三）には、信曉が正定閣と号していたことが知られる。

『国書人名辞典』収載の信曉の著書を見ると、『教行信証講釈』、『阿弥陀経即生篇』、『親鸞聖人茶毘所考』などの仏書（真宗学）が中心である。また、彼は梵曆を普門律師に就いて学んだ人であるか

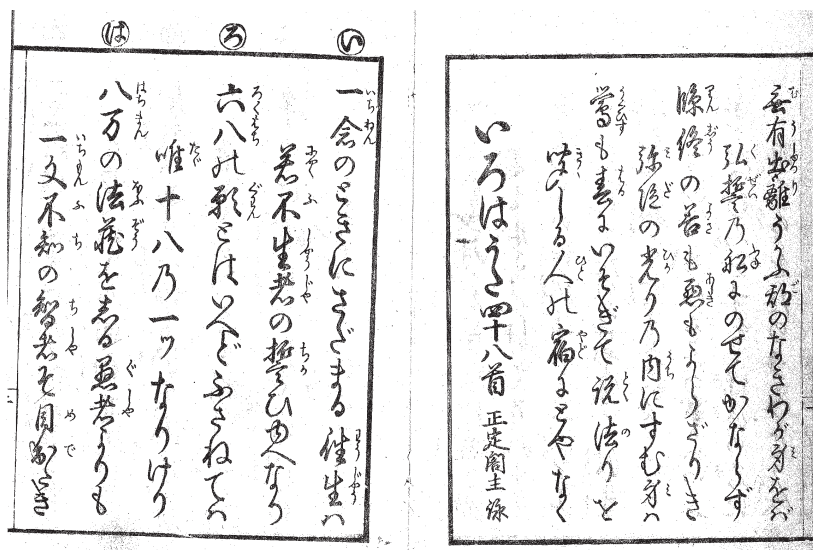


図8 『法のゑん』(天保14年刊、第1丁裏・第2丁表)

ら『大寒氣由旬便覧』、『頒曆講話並説教』などの梵曆書もある。こうした著作がある中で、一点だけであるが、『平太郎之記』(文政五年刊)と題する説話作品が確認されている。『平太郎之記』は真宗信徒の平太郎が熊野権現に参詣し、そこで夢告を見るという、『親鸞聖人伝絵』にも登場する有名な一場面を扱った作品である。この話は近世においては、浄瑠璃の『よこそねの平太郎』として真宗門徒を中心に広く知られた逸話であり、また『平太郎縁起』、『平太郎熊野参詣記』、『平太郎事蹟談』などの伝記類も多く作られている。信曉の『平太郎之記』も、こうした平太郎の熊野権現参詣をめぐる説話の一つである。このことは一例ではあるが、信曉が『嫁威谷物語』以外にも仏教説話の著述に関わっていたことを示している。

さて、大行寺の信曉を以って本書の著者とする私の仮説に対して、仏光寺派と蓮如との関係からその可能性を否定する人がいるかもしれない。

蓮如以前の真宗教団に於いて、仏光寺派は本願寺派を凌ぐ大きな勢力を占めていた。しかし、蓮如の登場によりその勢力地図は大きく塗り替えられる。室町中期の文明十四年(一四八二)、仏光寺派はその第十九代門主経豪が本山を捨て、蓮如に従い、本願寺に帰属する。そして、その後を追うようにして、山内四十八坊中の四十二坊、及び数千の末寺が仏光寺派を離脱し、本願寺に入った。仏光寺派は山内に六坊を残し、その末寺も大きく減少したのである。これ以後、仏光寺派にとって蓮如は、派の衰退のたらし人物となる。ゆえに、江戸末期の嘉永元年前後に東西本願寺を中心に行われた蓮如上人二百五十回忌の大法要も、仏光寺では勤められていない。因みに仏光寺派の中興は蓮如ではなく、第七代門主了源である。

結 び

こうした真宗史を踏まえるならば、江戸末期の仏光寺派学頭であった信暁が、蓮如の遺徳を讀める説話を著すことに違和感を覚える人がいても、それは十分に理解できる。しかし、信暁は大谷派（東本願寺派）の末寺に生まれた人で、仏光寺派に転派した後も、蓮如『御文』の注釈書である『五帖巻部御文寸珍』（嘉永二年「一八四九」刊）を出版している。信暁は一人の真宗僧侶として、派を越えて、蓮如を敬慕していたことが推察できる。ゆえに『嫁威谷物語』の作者として仏光寺派学頭の信暁を仮定することは可能であろうと私は考えている。

「正定閣述作」の一文は前述の通り、岩瀬文庫本や西宗寺版では削除されている。このうち岩瀬文庫本でこの一文が削除された理由は不明であるが、西宗寺版がこれを削除したのは、本書の作者が信暁であれば説明がつく。すなわち、「蓮如上人御往生之旧地」を誇る本願寺派の西宗寺が、他派それも仏光寺派学頭による著作を蔵版刊行することはいささか躊躇されたことは想像するに難くないからである。正定閣が仏光寺派学頭の信暁であるという私の仮説は、西宗寺版に於ける作者名削除の問題にも応え得るものと考えている。また、戸崎氏蔵本の奥書に記載されている菱屋友七と菱屋宇助の両名は、信暁の代表作である『山海里』第七編上冊（嘉永三年「一八五〇」版）の表紙見返しに「ひろめどころ」（販売店）としても記載されている。菱屋友七と菱屋宇助は、信暁と繋がりのある書林であったと考えられる。これもまた、『嫁威谷物語』の作者が信暁であることの傍証の一つとなるはずである。

今回の調査の範囲で言えば、『嫁威谷物語』はすべて版本で伝来し、その伝存本は極めて稀である。確認された諸本は(1)弘化四年版（筆者架蔵本、岩瀬文庫本、戸崎氏蔵本）、(2)西宗寺版（福大本、阪大本）、(3)明治二十一年版（国会図書館本）の三種類に大別される。この中では、戸崎氏蔵本が確認できていない現時点では、筆者架蔵本が最も古く、その本文と挿絵も整っており、これを底本とするのが適当である、と私は考えている。

また、本書の作者はこれまで未詳であったが、筆者架蔵本並びに戸崎氏蔵本の刊記にある「正定閣述作」という記事に拠って、それが正定閣なる人物であることが初めて明らかになった。『嫁威谷物語』には正定閣について記すところはないが、筆者はこの正定閣は京都、真宗仏光寺派学頭で、同派大行寺の開基であった信暁ではないかと推測している。その理由は(1)信暁の号が正定閣であること、(2)『嫁威谷物語』が刊行された弘化四年当時、すでに信暁が正定閣と号していたこと、(3)信暁は仏光寺派の学頭であったが、一人の真宗僧侶として蓮如を敬慕していたと推察されること、(4)信暁の著作に『平太郎之記』と題する仏教説話があること、(5)戸崎氏蔵本の刊記に載る菱屋友七と菱屋宇助は、信暁の著作と関係のある書林であることが挙げられる。

最後に、本稿は戸崎氏蔵本の調査を踏まえて執筆すべきものであることは言うまでもない。しかし、筆者の数年にわたる調査の範囲ではついに戸崎氏蔵本を見ることができなかった。そこで、不十分な調査ではあるが、これまでに明らかになったところを公開し、以

て戸崎氏蔵本の行方をご存知の方よりご教示給わりたく、本稿を記した次第である。

〈註〉

- ① 杉原丈夫編『越前若狭の伝説』（松見文庫、昭和四十五年二月刊）に拠ると、嫁威谷の伝承は、その内容に拠って、次の二つのタイプに分類できるという。第一は夫婦ともに健在で、老母は嫁が吉崎から帰る道を威かすというもの。本稿で考察している『嫁威谷物語』は、この型に属する。この型には本書以外に、了貞編『二十四輩順拝図会』第二巻収録「吉崎山」（享和三年「一八〇三」刊）、『越前古跡収集記』（福井大学附属総合図書館郷土資料室所蔵。写本。一冊本。成立年未詳）、吉崎西念寺の縁起がある。第二のタイプは、夫や子供がすでに死亡して嫁と老母のみで暮らしていること、そして、嫁が吉崎へ行く、その往路で威かすことになっている。このタイプには吉崎の順慶寺の縁起、山十楽の浄林寺の縁起が属する。『嫁威谷物語』と『二十四輩順拝図会』第二巻収録「吉崎山」に収録された嫁威し谷の由来とを比較すると、そのプロット並びにその文章表現が極めて似ていることは明らかである。信曉は『嫁威谷物語』の執筆に際して『二十四輩順拝図会』の「吉崎山」を参照し、そこに蓮如の遺徳を讃える趣向を盛り込んだと推定される。『嫁威谷物語』の本文を前述の第一のタイプの中で検討することは稿を改めて述べたい。

- ② 合翰堂は書袋の記事から京都の書林であったことは知られるが、井上隆明『近世書林版元総覧』（青裳堂書店、昭和五十六年刊）

には記載されておらず、その住所やどのようなジャンルの書物を刊行していたか等は未詳である。

- ③ 岩瀬文庫本に「正定閣述作」の一文がないことについて、岩瀬文庫古典籍書誌データベースも「以下削除か」と記している。

- ④ 『近世書林版元総覧』によると、丁子屋定七は刊記の通り、五条通り堺町西に店を構え、江戸前期の延宝四年（一六七六）に『神代箋』を、江戸末期の嘉永四年（一八五二）には『学童重宝古状箋』をそれぞれ合梓している。

- ⑤ 宗政五十緒・若林正治編『近世京都出版資料』（日本古書通信社、昭和四十年刊）、並びに朝倉治彦監修・宗政五十緒編『京都書林仲間記録』（ゆまに書房、昭和五十二年刊）にも『嫁威谷物語』に関する記事は記載されていなかった。

〔後記〕

本稿執筆に際して古典籍の閲覧・調査にご協力いただいた、国立国会図書館、愛知県西尾市立岩瀬文庫、福井県あわら市立金津図書館、大阪大学附属図書館、福井大学総合図書館にお礼申し上げます。また、本稿への写真掲載を許可してくださった福井大学総合図書館に重ねてお礼申し上げます。